

心豊かでたくましい児童生徒を育む
小中一貫教育をめざして

シリーズ えでゆれば

Vol.④

最後に一言お願いします。

小・中学校の教職員が「9年間で子どもを育てよう」と意識し始めたことだと思います。全国的に「小中連携」が叫ばれていますが、互いの校種の特性についてどの程度理解できているかは判断が難しいところであります。

三戸町では小・中学校の教員が意見交換できる場を積極的に設けており、今年度は町内すべての教職員がグループ毎の会議を年7回、各学校の授業公開を4回開催する予定となっています。

子どもと向き合う前に「9年間で育てる」という先生方の意識が大切であり、それが結果として子どもに還元されると考えます。

また、町教育委員会からのアドバイスにより、「早寝早起きアーチ」は、中学生に対する春休みガイドなどを実施しており、3月に開催された小学校進学を控えた子どもたちの不安解消、意識の切り替えという意味で、非常に良い機会となります。

当面、連携型で一貫教育を行う斗川小についても、より一層効果を高めるための連携を図っていきたいと思います。

本校教職員、生徒会役員による啓発活動、保護者の理解の高まりはもちろんですが、小学校段階での指導も多分にあると考えます。

また、年度当初の緊張感を差し引いても、目に見える変化だと言えます。このことは、小学校の先生方の中学校理解が以前に比べて深まってきていて、小学校段階でいるのではなくかと考えています。

私自身、着任して3年目を迎えたが、入学してくる生徒達を見た時、中学校における課題のいくつかが以前に比べて改善されてきているような気がします。

このことは、小学校の先生方の中学校理解が以前に比べて深まってきたが、小学校段階でいるのではなくかと考えています。

その変化は何によるものとお考えですか。

これまで、教育委員会からの情報を中心にお知らせしてきましたが、小中一貫教育の導入により学校現場はどのように変わってきたのでしょう。シリーズ4回目となる今回は、学校現場の声をお届けします。

今回は小中一貫教育について、三戸中学校の丸岡博校長にお話を伺いました。

小中一貫教育がスタートした3年目を迎えましたが、どのような感想をお持ちですか。

具体的にはどのような変化がありますか。

中学校における課題は少なくありませんが、そのひとつに学習規律の定着があげられます。授業を真剣に受ける、私語、忘れ物をしないなど当たり前のことではありますが、できない生徒が少なくありません。それが、昨年、今年と見てみると授業に向かう姿勢がずいぶん良くなっています。

また、一部の生徒に常態化しつつあつた遅刻が、今年度は限りなくゼロに近い日々が続いているいます。

6年生に対する春休みガイドは、中学校進学を控えた子どもたちの不安解消、意識の切り替えといふ意味で、非常に良い機会となつたようです。

さらに、三戸中では昨年度から中1ギャップの軽減を図るため、小学校の丁寧な板書やノート指導の継続を意識した校内研究にも取り組んでいます。

